演じ屋

霧艶 焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

演じ屋

【Nコード】

N3125L

【作者名】

霧艶 焰

【あらすじ】

もうすぐ卒業式を目の前に迎えた高校生男子。

彼はある日、父親が身に着けていたアクセサリーを手にする。

そして、その日から特別な力を身につけ……。

第1舞：初ミッション（前書き）

以前出版社に送ってみた作品です。

ちょっと作りが甘いのですが、一応掲載してみようと思います。

第1舞：初ミッション

第1舞：初ミッション

ことの始まりは、親父が亡くなってから13回忌を迎えた高校3年生の冬休みのことだった。

法事を終えた後、母さんに呼ばれて親父の仏壇の前に二人して並んで1つの箱を向かい合うように見ていた。

その箱は、生前親父が忙しくて家に帰れない時期があった時、母さんに預けられていたもので、俺が大きくなってから渡すように頼まれていた品だそうさ。

「いつ渡そうかと思っていたんだけど、昶ももう十分大きくなったことだし、渡してもいいかなって思ってたね。まあ、父さんからの大学合格祝いでも考えて受け取りなさいよ。」

笑顔で母さんは畳の上に置かれた箱を、ぽんと叩くと、はやくあけて見せてとせがんできた。

俺は箱を受け取り、そつとその蓋を開けてみる。中には綿花がぎっしりと敷き詰められており、その下にビニールが隠れているのが見えた。

邪魔な綿花を除けると、そこにはビニールに包まれた片方だけのピアスが入っていた。

「うわ・・・綺麗ね。」

確かに、綺麗である。単に綺麗というのではなく、そのデザイン性と繊細な技術が。

雫のような形の上にファントムの仮面と、その下から覗かせる別の仮面。これが何を意味しているのか俺には理解できないが、親父はこれを俺に残しておきたいと思ったらしい。

「まあ、ピアス丁度なくしたし、しておくよ。」

俺は親父のそのピアスを右耳につけた。今までジュエル系しか身に

着けていなかったが、シルバーピアスなので、やたらと光に反射して落ち着かない。でも、黒髪の下で輝くそれに違和感がなく、なんとなく気に入った。

「・・・じゃあ俺そろそろ友達と待ちあわせしてるから行って来る。」

「ちゃんと晩御飯には帰ってきなさいよ。」

母さんの声に「わかった」と一言だけ返して俺は出かけた。

家からバス停まで向かい、バスで駅前公園まで向かう。そこから交差点を越えた先に駅があり、そこから5つ先の町へ向かい友達と待ち合わせ場所で落ち合う約束をしているのだが・・・。

「なんだよこの人ごみ。」

駅前公園まできたのはいいが、いつも以上の人ごみに俺は動くに動けないでいた。

「畜生・・・遅れちまう。」

何とか人ごみを掻き分けて、駅へ向かおうと必死に前進する。

とりあえず、潰されそうになりながらも何とか駅のホームに辿りついた。

切符を買っていざ電車へ乗り込む。

不思議なことに、いつもぎゅうぎゅう詰めになるはずの車内は随分と空いていた。

とりあえず席に座ってあたりを眺める。

俺のほかにはスーツの男性が二人。女子高校生が一人。男女の中学生が二人。OLらしい女性が三人。子連れの親子が二組。それぞれ子供は一人ずつ。

うん、きつと普段ならこんな風にゆっくり回りの様子すら伺うことも出来ないだろう。

友達の待つ町まであと4つ駅を越えていかなければならない。

ガタンゴトンと、音を立てて揺れる電車に体を預けて座っていると、いつの間にか意識が吹っ飛んで眠りの世界へ飛びだってしまった。いた。

* * *

誰かに揺さぶられる感覚に、はっとして意識は覚醒した。

しかし瞼が重い・・・俺はそんなにも疲れていたのだろうか。

ゆっくりと目を開けると、俺の目の前にもものすごいドアップで一人の男性が覗き込んでいた。

「うおわっ?!」

「おはよー。」

思わず驚いて奇声を上げながら仰け反るように男性から離れたが、男性はさほど気にしている様子でもなく、笑顔で挨拶してきた。

「・・・お、おはようございます。」

「いやー、もう本当参っちゃうよね。寝るでもしてないとやってらんないよねこの状況。」

「この状況?」

この男性が一体何を指して喋っているのか理解できなくて、俺は辺りを見渡した。

すると、乗客の中に一人だけ銃器を持った男性が、挨拶をしてきた男性の後ろで彼に銃口を突きつけて立っている。

「・・・もしかしてジャックつてやつですか。」

「おお!大正解!悪いけど、ちょっと起きてもらわないといけない状況になっちゃったんだよね。ごめんけど、起きててくれる?」

申し訳なさそうに俺にそう告げた彼の黄緑に染めた髪の下には、俺と同じデザインのピアスがきらりと光っていた。

どうしてこの人も同じものをしているのだろうか。

でも、これが大量生産されているとすれば、持っただけでもおかしくはない話だけだ。

あれこれ考えていると、彼は立ち上がり、突然背後にいた男性を蹴り飛ばした。

綺麗に吹き飛んだ男性は壁に強く叩きつけられ、意識を失った。

辺りの乗客が歓声を上げようと口を少し開いた瞬間、すかさず人差し指で「しー。」と、乗客に声を出さないように注意した。

男性は相手から銃器を奪い、靴紐を解いて男性の腕を近くのパールにくくりつけて動けないようにすると、にっこりと微笑みながら俺に近寄ってきた。

「・・・な、何？」

「フロントムをしている・・・貴方、機関にいましたっけ？」

「機関？」

「おや？機関ですよ。わかりませんか？」

俺の耳で揺れているピアスに触れながら男性はそう聞いてくる。

だが俺には彼が何について喋っているのか全然理解できないし、機関について全く知らない。

さつきからこの男性、少し変だ。

その時、丁度倒された男性の通信機に彼の仲間であろう人物から通信が入った。

『おい、異常はないか？』

俺に質問をしていた男性は倒した男性からインカムを奪い、通信に答える。

「はい、異常ありません。」

絶対声色でばれる。そう思ってヒヤヒヤしたが、男性の口からは彼の声色ではない、先ほどまで銃器を向けていた男性と同じ声色が飛び出してきた。

彼は通信機の向こう側の相手を騙し、信じ込ませてしまったようだ。通信を切ったあと、彼は「簡単に騙されちゃったね」と言って笑いながら、突然自己紹介をしてきた。

「・・・僕の名前は雅。春風雅。君の名前は？」

「は・・・？えと、喰牙昶。」

「ああ、やつぱり。喰牙さんの息子さんでしたか。それならフロントム所持の意味も理解できる。」

「え？親父を知っているのか？」

「ええ、喰牙竜馬さんでしょう？ならよかった。私一人ではこの状況を改善することはできません。手伝ってくださいませんか？」
そう言つて雅さんは席に置いていたトランクケースを開けて、なにやら色々取り出し始めた。

「状況を改善するつて言つたつて・・・俺何もできない！」

「大丈夫。貴方は必ずお父さんの力を受け継いでいるはずですから。」

「受け継ぐも何も・・・！」

雅さんは俺に小さなポーチを渡して一言。

「ふぁいと！」

いい笑顔で俺に電車の上上がれと宣言した。

本当にこれ、何の罰ゲームだ。

「・・・マジかよ。」

雅さんに無理矢理窓から電車の屋根に上らせられて、今俺は間違ひなく突つ込まなくてもいいことに首を突つ込んでしまっていると感じた。

正確には巻き込まれたのだが。

とにかく、俺だつてこの状況を何とかしなければ、友達に合うことが出来なくなつてしまうため困るし、なにより、この状況からなんとか抜け出したい。こんなところで死にたくなどない。

だから今は、まだ未だに信じられる仲ではないが雅さんを信じて彼の作戦に乗ってみる。

雅さんの話ではこうだ。

ジャック犯の目的は電車の永遠運転により、俺達乗客を人質として警察に渡せないようにする状況をつくること。

しかし、このままでは決まった時間帯に停車している電車にぶつかつてしまう恐れがある。

なんとかその最悪の事態は避けなければならない。

今まで俺がいた車両は最後尾のため、運転席には誰もおらず、あの車両にはただ一人敵がいただけ。

つまり運転しているのは前の方の運転席になる。

二人して車内から前方へ攻めるのは効率も悪く大変危険であるため、上と下二手に分かれて運転席へ向かい主導権を奪い返そうというわけだ。

「だからって俺が上じゃなくても・・・。つかピアスのことまだ詳しく聞けてねえし・・・。」

結局あの親父とどういう関係なんだろう。仮面を被ってそそくさと下から攻めに向ったしまったけれど。

さくさくつと車上を進んでいくと、なんか二人ほどジャック犯が上ってきた。

こちらに気がついたようで、一人が襲い掛かってきたんでつい避けてそのまま蹴り落とした。

ああ、後方に転がってどんどん小さくなっていく。

残ったジャック犯から「酷い。」といわれたが、もつと酷いことをしているのはこいつらのような気がするのだが、確かに酷いことをした気がするのでその発言に否定は出来ない。

さつき蹴り飛ばしたジャック犯が落としたらしい通信機を相手に投げつけてやると、見事にクリーンヒットしたらしく、よろめいている所可哀想だが思いつきり殴り飛ばした。

幾度となくこの拳で不良を潰してきたことか。まさかこんな喧嘩用の重い拳がこんなところで役立つとは。

「うわ・・・。」

相手の顔が血に濡れている。これは俺のせいらしい。

・・・普通の喧嘩でこの拳使うの、やめよう。

その時、こいつの胸ポケットに入っていた通信機になった。

『おい、何か上が騒がしいようだ、お前ら何かあったのか？』

どうしよう。雅さんみたいに声色を変えられるだろうか。

しかし、ここで返事をしないと、他のジャック犯が不審に思って動き始めるだろう。

「いえ、ただ仲間とふざけてただけですよ。」

『そうか。』

・・・なんか出来た。倒したこいつの声を真似してみたら、以外と出来た。

どうゆうことだ？俺今までアニメキャラクターや芸能人、色んな人の声色の真似をしてきたけれど、どれも上手くはいかなかったのに。どうして突然できるようになったんだ。

「・・・そういえば、渡されたポーチ。」

雅さんから渡されたポーチを開いて驚愕。

「・・・リロード用の銃弾と仮面だ・・・。」

* * *

「なんか・・・おかしい気がする。」

「そうですか？リーダー気にしすぎなんですよ。」

「警察が乗り込んで仲間倒してたりしてな。」

先頭車両までくると、乗客を後方に集めて前方の方に二人。乗客の前に一人のジャック犯がおり、雑談していた。

しかし、相手は銃器を持っている。ここからは本気でやらせてもらおう。

俺は仮面を被って、先ほど倒した二人から奪った銃を両手に、俺は前方にいたジャック犯の一人を蹴り飛ばしながら飛び込んだ。

すぐ目の前にいたジャック犯の手に握られていた銃がこちらに発砲される前に相手の手首を自分の銃器で強く叩き手から銃を落とさせると、太ももを打ち抜いて立てないようにしてやった。

そして足元で未だもがいているジャック犯の腹を蹴り飛ばし、後方にいたジャック犯にぶち当てる。

見事にジャック犯の腹にヒットしたと同時に、彼らの背後にあった扉が開いてそのまま後ろの車両へ吹き飛んだ。

扉の向こう側からは雅さんが入ってきた。

「ほう。見事な仕事のこなし様ですね。しかも二丁銃使いですか。」

とても頼りになります。」

「親父の友人にならっただけだ。」

「さ、運転席にいる彼をつまみ出して止めますよ。」

「ああ。」

そう返事をしたときだった。

辺りに響く連射される銃声。

激しい音を立てて窓ガラスは粉碎。

驚いて振り返ると運転席から最後のジャック犯が出てきた。

「畜生！一般人のくせに！」

気を抜いていた俺はあっさり捕まってしまい、背中に銃口を突きつけられた。

そして、打ち抜かれた。

上手く足に力が入らずに俺はそのまま崩れ落ちた。

畜生？そりゃこつちの台詞だったの。

なんでこんなことに巻き込まれなきゃいけないかったんだよ。ただ普通にいつもと変わらない日常を過ごしていただけなのに、神様はなんて酷な真似を。

最初から神様なんて信じちゃいねえけど、やっぱりこつちいう時怒りのぶつけどころは神様っていう架空の人物になつちまう。

ああ、何を間違ったんだろう。

ただ普通にしてたのに。

「……いつもと、変わらない日常……？」

俺は、本当に変わらない日常の中にいて、それで満足しているのか？それって、とても悲しいことじゃないのか？

親父のピアスを貰ってから、今日はいつもは目にしない状況が多発している気がするし、実際ジャックにあっている今しているのだ。

もしかしたら、親父が俺にこのピアスを託したのは、俺に変わらぬ日常から抜け出させるためだったのだろうか。

「……くっ……。」

雅さんに襲い掛かり、組み敷いているジャック犯の姿がぼやける視

界に入った。
腕力では勝てないらしい雅さんはどうすることもできず、首を絞められている。
死なせない。
最後の力を振り絞って、俺はジャック犯に狙いを定め……
引き金を引いた。
放たれた銃弾がジャック犯の何処に当たったのかよくわからない。
次第にぼやけていく視界の中、赤が少し見えた。
隙を見て雅さんがジャック犯の体の下から抜け出したところまでは確認できたが、そこで俺の意識は完全にブラックアウトしてしまっ
た。

* * *

誰かに髪を撫でられているような気がする。
こんなこと小さいとき以来かもしれない。
それより、今俺は生きているのか死んでいるのか、はっきりしない。
ただ、意識だけが何も無い空間に一人でいるといった感じだ。
あの後ジャックされた電車どうなったのかな。
せめて乗客だけでも解放してあげたかったな。

「……………」

目を開けると、白い天井。鼻を刺激する匂いは薬品だろうか。
視界に入る情報だけでここが病院だと認識する。

「……助かったのか……？」

「ええ、助かりました。僕も君も乗客も。」
声が出た方へ視線を向けると、雅さんが隣に座っていた。
どうやら今まで俺のことをつきつきりで見えていたらしい。

「貴方がいてくれたおかげです。ありがとうございます……」
しかし、僕は貴方がまだ機関に属していないのにも関わらず、今回の事件に巻き込んでしまい、拳銃怪我を負わせてしまった。ほん

とうにすみません。」

申し訳なさそうに雅さんは不覚頭を下げて謝罪してきた。

「そういえば、まだ機関について、話聞いてないんだけど……。」

「……お聞きになりたいんですか？」

「できれば。親父も関係しているみたいだし。」

俺がそういうと、雅さんは知っている限りを話してくれた。

今回雅さんは親父の子孫である俺を探していたという話から始まったのには少々驚いた。

ピアスの件については、どうやら雅さんと親父がこのピアスを持っているのはある機関に属すると与えられる支給品らしく、機関に所属する者の証であるところを意味するらしい。

機関の名前は【演じ屋】。その名の通り演じる能力を持った人物達が集まった機関らしく、機関にはまだ雅さんのほかにも多くの演じ屋が所属し、世界各地に散らばっているという。親父が所属していたのは演じ屋・日本支部と中国支部だと聞かされた。

演じ屋では色んな人に変装したり声色を真似たりして今回のように敵を欺いて事件を解決したり、何か怪しい動きをしている会社や組織が存在すれば、社員の一人などになりすまし、内部情報を掴んだりすることをしていると聞かされた。

「……そうか。でも、驚いたな。親父がそんなことしていたなんて。」

「でしょうね。僕も昶くんと同じで、父親から継承された身なので、その気持ちわかります。」

「継承……それじゃあ親父が俺にこのピアスを渡すよう母さんに頼んでいたのって、俺に後を継いでくれてメッセージつきのプレゼントだったのか。」

「機関内部では自分の子供に継承することを認められています。親が演じ屋の子供は特に特殊能力を持ち備えている子が多くて、未来の演じ屋の有力候補とされているので……ただ、貴方は継承を望んでいますか？」

捜し求めていた親父の子孫である俺を目にして雅さんは判決を下さなければならぬといった。

継承を望むのならともに演じ屋の道を歩もうと。望まなければ、ピアスを返還し、つまらない日常を。

「演じ屋……か。」

今までダメだった声真似も出来るようになったのは、演じ屋としての能力が開花したってことを意味していたんだ。

「演じ屋稼業は、人を救うことが出来るのか？悲しませずに、済むのか？」

「少なくとも、悪ではありません。」

「……俺、立派に演じきれるかな。」

俺のその言葉に雅さんは微笑んで見せた。

「ええ。立派に演じれますよ。」

今はまだ声真似しかできないけれど、きっと立派に演じきってみせるから。

こうして、俺の演じ屋生活は始まった。

第2舞：少女の思い出

第2舞：少女の思い出

あのジャック事件から数日後、表向きは相変わらず代わり映えのない普通の高校生活を送っていたが、裏では演じ屋稼業でボディガードを行ったり、社長令嬢に化けて変わりにパーティに出たりと相変わらず変な依頼ばかりをこなしていた。

最初の頃は先輩の演じ屋や雅さんがそばについていてくれたが、次第に上達してきているから単独行動でも大丈夫だろうと宣言されて二週間前くらいから仕事は全て一人でこなし始めている。

最初の頃は声色を変えることしかできなかった自分にとって考えてみれば、よくここまで変装の技術やメイクの技術やらと上達したものである。

女性に扮装することも少くはないため、仕草や女装まで得意分野になってしまった。

気を抜くと、たまに女性らしい仕草で行動してしまうことも多々ある。

「昶、ほらまた女みたいな仕草してる。」

「へ？」

丁度現在は昼休み時間のため、学生はお弁当を食う時間であり、俺は屋上で親友の達也と一緒に弁当を食べていたんだけど、やっぱり仕事病というか、最近女装が多かったためか。

一口、口にしては手で口を隠したり、男子は皆胡坐かいて座ってるのに何故か1人だけちょこんと女子みたいに座ったり、話を聞き流してる時の女子がよくやる髪の毛をいじる仕草をしたりなどなど。なんだか女子っぽい行動を気づかないうちに行っているという最悪な症状が止まらない。

病気だ。もうこれ病気確定。しばらく女装のある任務は入れて欲し

くないな・・・。

「・・・女子じゃない。俺は女子じゃない。言うな達也。」

「食べ方もなんだかちまちま綺麗に食ってさ、マジお前女みたい。もしかして女になりたいの？」

「ないね。俺は男だ。男なんだ。女子なんて苦勞するだけじゃないか。」

否定してお弁当を食べる手を進めるけれど、なおも達也が女子っぽいというから俺はお弁当を食べ終えた後、達也を蹴り飛ばした。その後は午後の授業をいつも通りに受けて、達也と下校をした。

しかし、その際に通っていた公園で1人の少女がベンチに座ってなにやら深く考え込んでいる様子だった。

周りの友達と喧嘩でもしたのだろうかと思ったけれど、周りには人は誰もいなかった。

現在の時刻はもう午後六時半であり、正直、こんな小さな子がこの時間に外に出ていること自体正直おかしい。

母親がいるわけでもなさそうだし・・・。

「ごめん、達也、先に帰って。俺、あの子が気になる。もしかしたら迷子かもしれないし。」

「え？あ・・・わかった。」

達也とはそこで別れて、俺は少女へ駆け寄って声をかけた。

「ねえ、どうしたの？」

「・・・」

少女は警戒したような目で俺を睨んできた。

でもその目は涙で濡れていて、寂しさと悲しさをあらわしていた。

けれど、少女からは可愛い腹の虫の音が聞こえてきて、少女は顔を真っ赤にして伏せた。

「ぶっ・・・」

おかしくて思わず笑ってしまったら、少女が小さな手で俺の体を叩いてきた。

「ごめんごめん。調理実習でクッキー作ったけど食べる？」

「・・・男の人が作ったお菓子なんて食べれるの？」

「うわー。結構お兄ちゃんグサツてきたな今の一言。これでも家事全般は得意なんだからね。」

「・・・ごめんなさい。」

「ふふ。謝ることある？ほら、食べなよ。」

俺がクッキーを渡すと、少女は素直に受け取って頬張った。

一口、口にするると一瞬動きが止まった。

不味かったか・・・？それは失礼なことをしてしまったな・・・。

何か口直しになるものはないかと思い、俺が鞆の中を漁っていると、少女が一言呟いた。

「・・・お兄ちゃん、これ、おいしい。」

とつても素敵な笑顔で感想を言ってくれた。

それが嬉しくて、思わずこっちまで笑顔になってしまふ。

しばらく少女が空腹を満たすのを待ち、俺は後から少女から何故こんな時間にこんな場所にいたのかを聞いた。

すると、少女はゆっくりと答えてくれた。

「お母さんがね、ケーキ食べたいって言ったの。前にね、2人で買ったお星様の乗ったケーキ。もうすぐお母さんの誕生日だからね、お父さんとお店を探してケーキを買って、食べさせてあげようと思っただの。だけど、お店見つからないの。何処だったのか覚えてないの。」

「・・・そうだったんだ。それじゃあお兄ちゃんも探すの手伝ってあげるよ。」

「本当?!」

「ああ、本当!だから、もうこんな暗い時間になるまで外を歩くの禁止な!」

「うん!」

俺とちゃんと約束をしてくれた少女は、明るく笑って見せた。

それにしても星の乗ったケーキか・・・この辺りで買ったのかよくわからないけれど、この辺りにあるお菓子屋ではみかけないけれど・

・・・やるだけやってみよう。

「あ。一人で帰るのが危ないから、送っていくな。」

「うん。」

少女はベンチから降りると、差し出した手を握り返してきて、隣と一緒に歩き出した。

少女の家は丁度俺の通学路の途中にある高層マンションの3階らしく、迷うことなくたどり着くことができた。

3階の一番手前のドアの前に立ち、インターフォンを鳴らすと、ドタドタと騒がしい足音を立てながら、スーツ姿の男性が出てきた。

「お父さん！ただいまー！」

「理沙！お前今まで何処に行ってたんだ！」

「どうやらこの少女・・・理沙のお父さんらしい。」

理沙が飛びついていくと、お父さんは理沙を抱き上げて頭を撫でていた。

「君、理沙を連れて来てくれたのかい？すまなかったね。」

「いえ、別に。丁度俺の帰り道の途中でしたし。」

「そう言い、理沙に「ちょっとお父さんとお話したいんだけど、いいかな？」と行って、席を外してもらい、玄関の外で2人で話すことをお父さんに了承してもらった。」

「えっと・・・私に話ってなんだい？」

「理沙さんのお父さん、理沙さんはお母さんと一緒に食べた星が乗っているケーキを探しているようですが、ご両親方はケーキを売っていたお店を知らないのですか？」

俺がそう質問すると、お父さんはこう説明した。

その時お母さんと理沙さんがケーキを買いに行った場所は、徒歩で行ける範囲で、初めて行った場所だったらしくお母さんもよく覚えていないらしく、幼い理沙には道すら覚えられていないという。お父さんはその時はまだ就業時間のため帰宅はしていなかったという。

「そうか・・・なら誰もわからないんですね。」

「ええ。でも、ケーキは間に合うかわからないんです。」
「わからない・・・とは？」

お父さんは顔を伏せて、重たい口を開いた。

「妻は、もう長くないんです。いつ死んでしまっても、おかしくない・・・。」

「・・・ご病気なんですか？」

「ええ。現代の技術では治療は難しいといわれました。」

「・・・あの、俺もケーキの件、手伝いますから。」

それだけ言つと、俺はお父さんに頭をさげて、理沙にも挨拶をして足早にその場を後にした。

理沙のお母さんの命のタイムリミットはもうそう長くは待ってくれない。

ケーキ屋さんの所在地は不明。

「・・・やるしかないよな。」

俺はパソコンの情報や聞き込みでこの街にあるお菓子屋さんを数件調べ上げ、一軒一軒見てまわった。

けれど、どこにも星の乗ったケーキなんて存在しなかった。

「はー・・・。」

昼間、学校をサボつて調べてを進めてみたが、どうも駄目だ。

流石に昨夜から調べ物と調査・聞き込み・移動をするのは正直しんどい。

疲れて思わずその場に座り込む。

それと同時に肩をトントンと叩かれたので、振り返ってみると、そこには雅さんがいた。

「雅さん？」

「お星様の乗ったケーキを探しているんだって？」

「うー・・・見つからないんです。雅さん、知りませんか？」

「・・・もしかしたらなんだけれどね、一軒だけお菓子屋さん潰れてるんだよ。そこだったりしないかな？」

「潰れた?!」

「うん。ちょうど3ヶ月前くらいにかな。どうも家庭内事情が理由だったらしいけれど……。これだけ調べたんだから後の総仕上げは君の仕事だよ。」

そう行つて雅さんは俺に一枚の紙を手渡して去っていった。

俺はその紙を広げて、中に書かれている文字を目で追つていくと、そこには今の俺に必要なことが書かれていた。

理沙さんと彼女の両親に俺が唯一してあげられるささやかな希望。

俺は、迷うことなく、一目散に走っていった。

たどり着いた場所は、ごく普通の民家。本当に何処にでもあるような、普通の一軒屋。

その家に近づいていき、俺はインターフォンを押した。

『はい、猿渡です。』

「すみません。猿渡さん。私は喰牙昶といいます。猿渡さんをお願いがあつてきました。」

雅さんが渡してくれた一枚の紙。あれに書かれていたのは、潰れてしまったお菓子屋を経営していた猿渡さんの現在の住所だった。

猿渡さんは、突然やってきた俺に何の不信感も抱くことなく、気持ちよく受け入れてくれて、家の中で話しを聞こうとってくれた。

リビングについて、ご丁寧にも紅茶とお菓子までだしてくれた。

「で、昶くんだけ？私になんのようかな？」

「はい、あの、私が今回猿渡さんにお会いに来たのには理由がありまして……。長くなるのですが、聞いていただけるでしょうか。」

「ああ、かまわないよ。」

いい笑顔でそう答えてくれた猿渡さんに、俺も安心して今回ここにお願いをしに来た理由を話した。

理沙が星の乗ったケーキを探していること。お母さんにそれを食べさせたいという2人の気持ち。

お母さんの命の残量がそう長くないこと。猿渡さんがケーキを作ったのではないかという不確定な情報を掴んで、ここにやってきたこと。

ありのまま全てを正直に話した。

俺の話したことを聞いて、猿渡さんはしばらく紅茶の入ったカップを見つめながら、考えていたが、ふっと笑って俺にこう提案してきた。

「残念ながら俺はもう職人じゃない。だから作ってあげることはできない。けれど、その理沙ちゃんに作る気があるというのなら、私も手伝うし、彼女が作って、プレゼントしてみたほうが思いがこもっているから私が作るより何万倍も良いプレゼントになると思うが？」

「・・・猿渡さん・・・俺今、怒涛の感動の嵐にさらわれて溺れかけてます。すごい格好いいです。」

「はは。それじゃあそいうことで決まりだね。理沙ちゃんによるしく伝えてよ。」

「分かりました。」
俺は猿渡さんにお礼を言った後、すぐに理沙のところへ向ってそのことを伝えた。

彼女はとても喜んでおり、明日は彼女も学校が休みだということなので、あの日出会った公園で待ち合わせをして、猿渡さんの自宅で3人でケーキ作りをすることとなった。

* * *

「猿渡さん、今日はよろしくお願いします。」

「おじちゃん、よろしくお願いします。」

2人で挨拶を交わして猿渡さんの元へ行くと、猿渡さんは笑顔で迎え入れてくれて、自宅用ではない業務用の厨房に俺たちを特別に入れてくれた。

大きな厨房に入ると、そこにはケーキを作るために必要な材料がすでに準備してあり、理沙にも作業がしやすいようにと、安全性にも配慮されている小さな台が作業台の下に置かれていた。

本当に猿渡さんって優しい人だなあ……。こういうお父さん欲しいかもしれない。

「理沙ちゃんの作りたいのは、お星様の乗ったケーキだったよね？ここに一応レシピも置いてあるからお兄ちゃんに読んでもらいながら、ケーキを自分たちで作ってみようね。ちよつと難しいところは、おじさんもお手伝いしてあげるし、わからないところは教えてあげるからね。」

「うん！おじちゃんありがとう！」

理沙の元気のいい返事を合図に、俺たちは作業を開始した。

理沙には飾り付けるためのお星様を先に作ってもらうことにして、俺はケーキのスポンジを作り、猿渡さんは次の準備を進めていく。

スポンジ生地をトレイに流し込み、オーブンで焼き始めると、丁度俺の携帯がなり始めた。

ディスプレイに表示されるのは理沙のお父さんの名前だ。理沙の送り迎え等のあるので一応電話番号を聞いておいたのだけれど、一体何の用だろう……。まだ作業を開始してからそんなに時間もたっていないのに。

俺は通話ボタンを押して、電話に出た。

「はい、喰牙です。」

『もしもし、赤城です。理沙の父ですが……。』
電話越しに聞こえてきたのは、何処か落ち着かない様子の声の理沙のお父さんの声だった。

俺は一旦厨房からでて、猿渡さんの家の外まで出ると、受話器に耳を再度あてがって話しを続けた。

「……どうかしたのですか？」

『それが……。妻の容態が急に悪くなってしまうて……。』
「……。はい。」

他の家のことなのであまり深くは聞くことは出来なかったが、なんでも昨夜から容態が悪くなり始めていたようで、病院側が迅速な処

置をして一晩を越したのだが、昼間になってから容態が一気に悪くなり始めたとか。

理沙を俺に預けてから病院へ向うと、奥さんは結構ヤバイ状態だったらしい。それで今は付き添っているということ。

流石に理沙に奥さんの苦しんでいる姿を見せることが出来ないとのこと、今日は俺に理沙を預けたいという。

俺は了承し、電話を切ると、俺の母さんに連絡を入れておいた。

「・・・なんとか、保って欲しい・・・。」

せつかく理沙が一生懸命になってケーキを作っているのだから、せめてそれだけは受け取って欲しいと思う。

一緒に食べて欲しいと思う。

それが彼女の夢でもあり、奥さんの夢でもあるのなら、せめてそれだけでも。

俺は携帯を閉じて、厨房へ戻るとケーキ作りを再開した。

「もー！お兄ちゃん何処に行ったの！」

「ははっ。ごめんごめん。ちょっとコンビニで立ち読みしてた。」

「もー・・・。」

厨房に戻ると理沙はご立腹のご様子で俺の前に仁王立ちして、頬を膨らませていた。怒っている様子だったけれど、すぐに頬を緩ませて微笑んでいた。

「さ、ケーキ作り再開だよ。スポンジも焼けたようだし。生クリームも作って置いたから生地に綺麗に塗れるかな？」

「任せて！」

理沙は丁寧に生クリームを塗り始めた。

その日の作業が終了し、俺は理沙にお父さんがちょっとお仕事で遅くなるから俺の家で一晩だけ泊まってほしいと伝言を預かったということを伝えると、一瞬瞳が揺らいたが、頷き返した。

本当は、お父さんともお母さんとも一緒にいたいのだろうけれど・・・。

その日は俺の母さんに多少の甘えを見せていた。きっと、いつもは

自分の母親とは触れあう機会が少ないからか、こうして他人の母親に触れることで寂しさを補っているのかもしれない。そう思った。

「・・・理沙ちゃんもかわいそうだね。」

「雅さん・・・いきなり窓から登場しないでください。」

1人自室でぼーっとしてしていると、いつの間にか雅さんが机の横の窓から身を乗り出して不法侵入してきた。まあ、こうして家に来ることが少なくないので結構慣れてしまったのだけけれど。

「・・・君も母親と父親に会いたいと思ったことがある？」

「・・・何処まで俺のこと調べたんですか。プライバシーの侵害で訴えますよ。」

「うーん、それは嫌だな。組織内での反発なんて。まあ何処まで調べたのかと言うと、君が引き取られる前くらいかな。」

「うん。とりあえず一度逝ってしまえばいいと思います。はい。」

「わかった、わかった。もう二度としないから僕に麻酔銃向けるのやめてくれないかな。いくら麻酔銃とは言え0距離でも結構痛いから。仮面なしじゃなおさらだから。」

演じ屋家業故、任務中人様に素顔を見せることはタブー。そのため演じ屋1人1人模様も形状も違う仮面を被って任務に出撃するのだけれど、プライベートで俺の元に来ている雅さんは今仮面などしていない。もちろん痛いだろうな。頭に注射するだけでも皮膚が硬いから相当痛いらしいし。

まあ仲間同士で打ち合いする気など微塵もないので、早々に銃をおろした。

ほっとした様子で胸をなでおろした雅さんは窓の縁に腰掛けたままの状態で話始めた。

「赤城さんの奥さん、今夜が峠かもしれないって。」

「・・・理沙のケーキ食べれないのかな・・・。」

「・・・さあ・・・どうだろう。そこはもう奥さんの生命力にかけるしかないよ。」

何も言えなくなった俺たちの間を冷たい夜風が通り抜けた。

俺の黒髪の下で揺れるフロントムが鳴く音を聞いて、何故か切なくなつた。

しばらく俺たちは、そのままの状態で夜空を眺めていた。

翌日、理沙と出来上がったケーキを持って病院へ向つた。

理沙のお母さんのいる病室の前まで行くと、病室の前に雅さんが壁に寄りかかっていた。

「雅さん。」

「・・・理沙ちゃん。そつちのお兄ちゃんとちょっとお話あるからお兄ちゃん借りてもいいかな？」

雅さんが理沙に視線を合わせてそう問うと、理沙は俺の足にしがみついてきた。多分、雅さんのことを警戒しているのかもしれない。まあ、そりゃそうだ。よく考えれば今日初めて雅さんと顔合わせたんだもんな。

「理沙ちゃん。大丈夫だよ。この人は俺の友達なんだ。」

「・・・うん。」

「そう。友達。」

「・・・お兄ちゃん、絶対返してよ？」

「うん。ちゃんとお兄ちゃん返すからね。」

そう雅さんに約束を交わすと、理沙は渋々俺の足から手を離れた。

「中でお父さんとお母さんが待っているから、ケーキ渡しておいで。」

「うん！」

そう聞くと、扉を開けて両親が待つ病室へ入って行つた。

「・・・ここから先は、赤城さんと理沙の問題だからな。」

「そういうこと。まだお母さんのほうは大丈夫みたいだよ。」

「そっか。よかった。ケーキが無駄にならなくて。」

そう言葉を交わしていると家族の楽しそうな声が聞こえてきた。

きつと理沙のケーキを食べてもらえたんだと思う。

互いに顔を見合つて微笑むと、俺たちは早々にその場から立ち去つ

た。

理沙が病室から出てくるまでロビーで待っていた俺は、いつもより輝いた笑顔で出てきた理沙を見て、今回理沙と出会えてよかったと思っただ。

あれからはこちらから連絡を取ることもなく、いつも通りの学校と任務の生活に戻ったのだけれど、時々理沙が公園で学校から帰宅する俺を待ち伏せしていることがある。

その時は一緒に公園で遊んだり、またお菓子作りをしたりしている。その時理沙が母親の状態を報告してくれるのだけれど、あのケーキを食べて以来、徐々にではあるが母親の病状は回復しているらしく、まだ外出ができるわけではないが、喋ることも多くなり、笑顔を見せてくれるようになったそうだ。

「よかったですじゃないですか。任務では味わうことの出来ない経験が出来たわけですし。」

「そうだな・・・。」

「まあ、任務でも味わえない経験はするといえませんが、ね？」
そう言っただ雅さんは瞳を瞑った絵が描かれた仮面を被った。それと同時に俺も片方だけ涙を流した絵が描かれた仮面を被ると、二丁銃をホルスターの中にしまい、2人でビルから飛び降りた。

今宵も人知れず演じ屋は舞台に舞い降りる。

しかし、この時はまだ俺も知らなかった。

俺に危険が近づいてきているということ。

第2舞：少女の思い出（後書き）

実は短編なので4話しかないっていうオチ。

続編書く予定ですが、そちらのほうをもう少し長く書きたいと思いません。

第3舞：クライシス

第3舞：クライシス

最近頻繁に見るようになったよくわからない夢。

いつもそれは水面に落ちる一粒の雫から始まる。

儂い音を立てて雫は水面に落ち、一気に視界は広がり、湖の周りを木々が囲んでいる風景。

その湖の上に1人の女性は白いワンピース着て、ヴェールのようなものを被っているためその素顔はよくわからない。

けれどいつも何かを呟いている。

「
」

貴女は誰？ どうしていつも俺の夢に出てくるんだ？ 俺に何を言いたいんだ？

そう問いかけようとするけれど、俺の口からは声は出ない。

強い風が吹き始め、視界が悪くなる。

その時が現実に戻るとき。

「・・・また、か。」

結局誰なのかわからない。ただ、何処か懐かしいと思うんだ。

「昶！ 今日昶が朝の当番だったでしょー！」

「・・・ヤバッ！！」

すっかり忘れていた。今日の朝食の当番は俺じゃないか。ちなみに俺の家では俺と母さんで交互で食事当番をしているんだ。このところ任務を詰めに詰めて働いていたため疲れていたのか、かなり熟睡してしまっていた。

普段起きる時間は7時でそれから朝食を作るようにしているのに今日はもうすでに8時。よかった学校休みで。

素早くその辺りに放置していた洋服に着替えると、キッチンへ向い素晴らしい速さで朝食を作り上げた。

今日のメニューは麦ご飯に切干大根の味噌汁、ほうれん草の胡麻和えにこの間作り置きしておいた一文字のぐるぐるがあつたからそれを。うーん俺主婦に勝てる気がする。

「昶料理上手くなつたわよねー・・・もう私料理放棄していいかしら？」

「止めてくれない？そういうの止めてくれない？母さん一度放棄すると他のことにも連鎖していくから嫌なんだよね。」

「もう、冗談よじょーだん。」

「母さんが言うつと冗談に聞こえないんだよ・・・目がマジだしさ・・・」

他愛もない朝の会話。これが成り立つまでにどれだけの時間を要しただろうか。

振り返れば、俺には親など存在しない。

出会った頃には喰牙の息子だと雅さんに言われていたけれど、親父は俺の實の父親ではないし、今日の前で幸せそうに朝食を食べている彼女も俺の實の母親ではない。

俺は元々孤児だ。施設に入ったのは物心つく前であつたので自分の両親の顔とか全く持って知らない。つか、覚えているわけもない。ママ先生がいる施設が俺の本当の家で、そこにいる子供とママ先生とパパ先生が自分たちの両親だと思っていたけれど、幼稚園へと通わせられている時、他の子供の母親から発せられた言葉を聞いて初めて分かつた。

『あの子、捨てられていた子らしいわよ。』

『じゃあ両親もいないのね。』

俺には両親がいないということ。捨てられたという事実を。

それから塞ぎ込んだ俺にママ先生もパパ先生も手を焼いていたけど、ある日今の親父が来て、俺を引き取つて、この家に連れてきた。

その時すでに母さんもこの家にいたんだ。普通なら男女間で夜の営みで子供を授かればいいのにと今では思うけれど、彼女にはそれができない理由があつた。

なんでも元から子供が授かりにくく、授かっても流産が続いたそう
だ。

そんなある日、親父が施設の前を通りかかった時、遊ぶ子供たちの
中でただ1人、何処を眺めているのかわからないといった様子の俺
に目が留まつたらしい。

引き取られた当時は他にも子供はいただろうにと思っていたけれど、
今では引き取られて良かったと思う。

きつと親父との出会いがなければ母さんとも出会えなかったし、雅
さんにも、理沙にも、クラスの皆にも会えなかっただろう。

「・・・明日か・・・昶の卒業式。」

「あ・・・そうだったね。明日か・・・。」

早いものでもう高校を卒業しなければならぬ。

冬休みくらいから本当色々あったな・・・とか思っていると、携
帯が鳴った。

着信は雅さんからだった。

「最近携帯よく鳴るわね・・・彼女？」

「うーん・・・彼氏？」

「うそっ！？昶いつからソツチの世界に飛び込んだの!？」

「冗談だつてば。ごめん、後片付けお願い。」

母さんは頷いて了承したので、食べ終わった食器を水につけておい
て俺は急いで外へ出て電話に出た。

『おっそーい!』

「すみません・・・。あの、それで何か？任務でしょうか？」

『うん。今回はもしかしたら苦戦するかもしれないけど・・・。』

『

今回の任務は大手ゲーム会社の裏事情を探るというもの。なんでも
今夜がその会社の50周年記念らしく、パーティーが都心部のツイ
ンタワーで行われるということで、雅さんとの任務となった。

『ごめんね、明日卒業式なのに。うちの家業はたとえ表向きの仕事
で明日重要な会議があるうと、取引先との打ち合わせがあるうと、』

関係ないらしいから……。」

「いえいえ、大丈夫ですよ。それじゃあまた夜に。」

俺はそこで電話を切り、自宅に戻って準備でもしておこうと踵をかえそうとしたのだけれど、聞きなれた声に呼び止められた。

「あつきらー」

「達也……！」

3年生だけは卒業式までしばらく休み期間に入っている常態なので、久しぶりに達也の姿を見た気がする。

しばらく見ないうちになんだか髪の毛のセットの進化が進んだ気がする。

何故Bボタンを押さなかった達也。

「なあなあ、昶今暇？暇だよ？引きこもり自宅警備員の昶くんは暇に決まってるさ！っーわけで、後ろに乗りなッ」

「俺何も言っていないよね。一言も暇なんていっていないよね。つか引きこもり自宅警備員ってなんだよ馬鹿にしてんのか？別に引きこもってるわけじゃないパソコンで株の推移を見ているだけだ。」

「……普通の高校生はそんなことしませーん。もう早くしろよな！！」

痺れを切らしたのか達也は俺の腰をガツチリホールドすると、担ぎあげた。

流石の俺もこれは恥ずかしい。嫌だ！近所の奥様方が見ている！！ほら、ヒソヒソなんか言ってるじゃん！回覧板で口元隠してなんか言ってるじゃん！

「ちょ！馬鹿、止めろ！馬鹿達也！！」

「嫌よ嫌よも好きのうちってな？さあお嬢様、しっかり掴まってないと落ちますよ、と。」

ゴーグルをして、達也はエンジンをかけ、バイクを運転し始めた。流石に降りれないので、仕方なく、俺は達也の腰に掴まったのだけれど、掴まると同時に後方から奥様方から黄色い悲鳴が……否、雄たけび声が聞こえた。あれだ。多分あの人たち貴腐人だ。なんか

受けとか攻めとか聞こえるもん。

なんだか嫌になってきた……。もう俺この町から消えたいかもしれない。

はぁ……。と、大きなため息をついて俺は仕方なく達也に掴まって、流れに身を任せた。

しばらくして、体を揺さぶられている感覚がして、目を開くと、呆れた様子の達也が背中中で眠りこけていた俺を片手で支えていた。

「おいおい、いくらなんでも眠り姫にはなるなよな。急に体が傾いたからビビッたぞ。」

「ごめん、なんか最近疲れててさ……。。」

「俺は子供を向えに行つたお母さんじゃないんだぞ。ったく。」

バイクから鍵を抜いて、達也が降りたので、もう着いてしまったのだろう。

辺りを見渡せばなんだか見慣れたような場所だけれど、暗くてよくわからない。

きよろきよろと辺りを見てみると、突然後ろから目隠しをされたものだから、ビックリしてバイクから落ちそうになったが、達也が受け止めたらしく衝撃はなかった。というか、なんか抱き上げられているのかな……。体浮いている。

「達也？なにこれ？ドッキリ？ドッキリなのかな？つか降ろして欲しいな……。みたいな。」

「まあまあ。ちよつとしたサプライズ？」

意外と達也は力が強いな……。腕から抜け出せない……。

仕方なくそのままの状態していると、何処かの扉がガラガラと音を立てて開かれるのが聞こえた。

降ろされたのは多分椅子。うん、多分これ椅子だよ、パイプ椅子かなんか。

「さて、じゃあ目隠しさん取り外しまーす！」

何処か楽しそうな達也の声と同時に目隠しは取り払われた。

若干ぼやける視界がしだいにはつきりしてくると、そこは学校の教

室だと分かった。

「そんじゃーこれより、喰牙昶ちゃんのー！お誕生日をお祝いしちやいませー！！」

そう達也が叫ぶと同時に、廊下からクラスメイトが雪崩れのように入ってきて、クラッカーを鳴らしたり風船を飛ばしたりしてきたものだから、すぐに状況を理解できなかった俺はクラッカーの音にビツクリしたまま固まってしまった。

「・・・た・・・誕生日？」

「そう。お前今日誕生日だろう？」

「・・・あ、ああ、そっか。忘れてた。」

任務続きの日々だったもんだから、今日が何日なのかすらよくわかっていなかった。

よく考えたら明日が卒業式なんだから、2月の最後って今日だもんな。そうだよ。俺今日誕生日だった。

「昶、誕生日おめでとう！！」

「・・・ありがとう。」

まさか皆で祝ってくれるとは思わなかったから、嬉しさは倍増だ。思わず知らず知らずのうちに微笑んでしまう。

「そんじゃ、今日の主役は昶だかな。Happy Birth Day！！My Sweet Honey！！」

「俺お前の愛人とかじゃないから。」

相変わらずふざけたままの達也に一発グーで頭を殴った。が、正直嬉しくて照れ隠しなのは多分達也にはバレているだろうな。くくつ、と変な笑いを漏らしながら、達也はなんだか随分不恰好で甘ったるそうなケーキを切り分けてくれた。

最初は俺の誕生日を皆祝ってくれていたけれど、やっぱり久々に皆会ったものだから、休み期間中にあつた様々なことを話したくて、まるで休み時間のようになっていた。

その様子をまるで遠足にでて遊んでいる生徒を見守る先生みたいにしばらく眺めながら、他愛もない話を友達としてしていると、雅さんか

ら着信が入った。

「・・・春風雅？何々彼女？」

「いや違うから・・・。」

否定した俺の声は女子の黄色い悲鳴でかき消された。

まあ・・・とりあえず電話に出ることにした。

「はい、喰牙です。」

『さつき言い忘れていたんだけど、受付が午後6時からなんだけどさ、流石にそこから都心部に向うには時間かかるから早めに準備して。落ち合い場所は・・・』

落ち合い場所を言おうとした雅さんの声が遠のくを感じ、携帯が手から奪われたのが分かった。

横を向けば達也とその他男子が興味津々といった様子で耳を傾けている。

「雅さんですか！？昶の彼女ですか！！？」

『・・・。。』

電話越しに感じる雅さんの微妙な感じの気配というかなんというか。すごく怖い。後で起こられそう。

「あの・・・電話かえし・・・。」

「彼女ですか?!」

『ええ、私昶の彼女なのー』

えー?!この人乗っちゃったよ！声色女性に変えてこいつら騙しちやっただよ！ついでに俺の心もブレイブブレイクされちゃったよ!!

「ちよ・・・返せ!!」

達也から携帯を奪うと俺は足早に教室から出て、人気のない鶏舎の裏まで走って逃げた。

「彼女にされちゃったねー。」

「・・・！なんでここにいますか・・・。」

鶏舎の裏には何故か雅さんが黒のスーツをびしっと着込んで立っていた。というか、何故こんなところにいるんだ？

しかも何か準備万端といった様子でアタッシュケースが足元に2つ

置いてあるし。

「何でといわれても・・・受付に間に合わなくなるから迎えに来たんだよ。ほら。」

ほら、といわれて投げ渡された片方のアタッシユケースを慌てて受け取る。なんだろう。アタッシユケースの重さを引いたとしたらかなり軽い。

「早々に着替えてください。近くのショッピングセンターの駐車場に車を待たせてあります。中身はスーツです。貴方の体形に合わせて作っておりますのでサイズはぴったりのはずですよ。」

「うわ・・・すげえ。」

ケースを開けると俺専用らしい黒のスーツと仮面が入っていた。素早くそれに着替え終わると同時に雅さんが携帯で車を呼んでいるらしく、すぐに裏門に回るように促されて、荷物を持つを足早に移動した。

裏門に待っていたのは黒のリムジンで、今の俺の格好からぱっと見周りからはマフィアか何かじゃないのかと疑われそうだなとか思ったのは心のタンスにしまっておこう。

背中を押されてリムジンに乗り込み、俺たちはツインタワーに向けて車を走らせた。

「・・・昶・・・?」

その時、1人の生徒が俺の後ろ姿を見ていたなど露知らず。

* * *

二時間後、丁度6時からの受付に合った俺たちは、偽名をスラスラと書き終えると、ホールへと足を向けた。

ホールへ向えばそこには豪華な料理と豪華な家具、貴族っぽいかにも上層クラスの間人がうじゃうじゃと蟻のように群がっており、社長が訪れるのを今か今かと待っている。

なんつーかもう下心丸見えなんだよな。汚いよな上層クラスの間人

は。

とりあえずまだ人気が少ない二階へ移り、互いにワインのグラスを片手にいかにも楽しそうに話をしていますよ。と、いった雰囲気をかもし出しながら、これからの流れを打ち合わせした。

この後社長が出てくると、しばらくの演説があり、その後ステージでは新作ゲームソフトの体験等が始まるそう。それと同時に1人はこのツインタワーの6階にあるメインコンピューターの中にアクセスし、情報を入力する。もう1人は会場にいる招待客の中からこの会社のことを色々聞き出す。そういうことになった。

後はどちらが会場か、本社6階かということだ。

「よし、僕が会場で情報を収集しよう。僕の女装で魅了されない人なんかいないんだから。それに君はハッキングできるだろう?」

「そうだな・・・じゃあ俺が本社へ乗り込もう。」

ワイングラスを鳴らす。それがミッシヨンスターの合図。

雅さんはすぐにスーツを翻し、女装した状態になるとホールへ降りていった。俺も、本社の入口手前までくると、トイレの中ですぐにビジネススーツに着替え、他人に扮装して本社へ乗り込んだ。

本社の社員が普段入ってくる正面玄関があるのはビルの3階だ。それ以下は先程のホール会場と、会議室・倉庫等があるだけで普段は使用しない。

一応一般社員に扮装しているのでこのままエレベーターで上がった際見つかってしまつては不味い。屋外の階段があるようなのでそこから3階まで上った。

ちなみにこのツインタワー・・・屋外階段で登る1階分の階段の量は通常の2倍らしく、2階分登つてやつと1階らしい。

ある意味登るのが苦行だった。足が死ぬつて。どういう構造してるんだよこのツインタワー。違法建築だろ。そうなんだろ?社員に対する優しさが感じられないよ。

ぶつぶつ文句を呟きながら3階・・・およそ6階分の階段を上り詰めると、扉に『?』と書かれた扉がやつと現れた。

扉の向こうからは人の気配は感じられない。辺りにいる様子でもないようだ。

そつと扉を開けて、中へ入ると、俺は6階を目指して足を進めた。なんとというか、流石ゲームソフト会社というか。オフィスでは真面目にゲーム製作に取り組んでる様子の人もいれば、なんか・・・恋愛シミュレーションゲームをしながら「フラレタ・・・。」とか呟いて落ち込んでる様子の人もいる。

あ、あの背景グラフィック描いてる人のTシャツすごくシユールだな・・・『肉食獣？いいえ、草食獣です。』だって。ベジタリアン宣言のつもりかなあれ。

「・・・。」
かなりのほほんと通り抜けてエレベーターの前までたどり着いてしまった・・・。

いや、だってね、社員の皆さんオフィスから出る気配すらなければ、動く様子もないんだよ。

むしろ・・・皆さんゲームに熱中してるんだよね(；´∩｀)

・・・まあ、とりあえず乗ろう・・・。

一方その頃の雅さんだけけど・・・

「ねえ、社長の何処に貴方は惹かれていらつしやるの・・・?」

艶やかな声色で男性共を魅了し、惜しみもなくふつくしい美脚をさらけだして女性を演じきっていたそうなの。

その間に俺はもう6階についているわけですし、今現在メインコンピューターのある部屋を探しています。

廊下の左右に立ち並ぶ扉は3階のオフィスのように中が見えるような仕組みにはなっておらず、なんだかちょっとワンランクアップしたような素材の扉です。あれです、校長室の扉並みのレベルだと思います。

「・・・。」

とりあえずそれっぽい部屋を2、3開けていくうち、いかにもメインコンピューターといった感じのパソコンを発見した。

なんで分かるのか？そりゃそうだろ。だって学校のパソコン質にあるような普通のパソコンとは違い、一台だけなぜかタワーの部分が透明で中の部品見えてるし。

パソコンの電源を入れてしばらくいじっているとパスワード認証が出てきた。

俺は改造したプロスタイルの携帯とメインコンピュターをリンクさせてハッキングを始めたのだけれど・・・誰かの気配がした。

振り向けばそこには、1人の男性が立っている。整った顔に薄い青の瞳と灰色の髪の毛がとても印象的だったが、今はそれ以上感想を述べている場合ではない。見つかつてしまったのだから。

「・・・部外者確認。排除します。」

「?!」

なんとも機械的な言葉を呟いたかと思えば、目にも止まらぬ速さで俺の懐まで踏み出して、拳で腹に重い一発を打ち込まれた。受身も取れずに俺はそのまま吹き飛ばされて、後方にあつた別のデスクに強く体を打ち付けた。

「・・・っ・・・なんだ・・・アンタ・・・。」

「・・・私はこの会社の警備員、ライトだ。IDを持たない社員を1人認証した。それが君だったから排除しにきたまで。」

ID・・・？IDってなんだよ。ってか・・・スゲー痛い。人に殴られるのってこんなに痛くて、殴る拳もあんなに重いものだっただろうか・・・。何か変だぞこいつ。

ふらふらした状態で立ち上がり、俺は二丁銃を構えた。それを見てか、ライトの表情は変わることはなかったが、若干瞳が揺らいだように感じた。

「銃刀法違反です。」

「いやいや、アンタも何気に腰に真剣さしてるっばいけど？」

「・・・そうですね。でもそれは私には関係ない。私はそうマスターに命令されているにすぎない。」

そう言うと、ライトは真剣を鞘から抜いて構えた。

俺も銃を構えなおして、戦闘態勢に入る。それと同時にライトは構えたままの状態であんなに速く踏み込んできた。

それに対して俺は一発発砲をする。音を光り、それと多少の衝撃だけであつたがそれだけでも十分だ。

俺は動きにくいビジネススーツを脱ぎ捨てて、戦闘用の動きやすいスーツに早着替えをし、顔を見られないように仮面を被つた。

流石にメイクで他人の顔をしているとはいえ、さっきの衝撃で少々メイクがはげかけている。素顔を見られては大変だ。

「・・・貴様何者だ。」

「ナマモノだが、何か。」

そう言つてやると再び切りかかつてきた。俺は二丁銃に仕込まれている近距離用のナイフを出して、刃を受け止めると、驚いた様子のライトの腹に蹴りをお見舞いしてやつた。多少吹っ飛びはしたものの、やはり何か違和感がある。

人間の体つてこんなにも重いというか・・・。

「変わった武器なんだな。」

「そりやどーもー!!」

余裕の表情でこちらを見ているライトの太ももに一発銃弾を打ち込んで、立ってないようにしてやろうと発砲したのだが・・・ライトは平然とした表情でこちらをみている。

「・・・な・・・っ・・・なんだと?!」

普通なら足の力が抜けて崩れ落ちるか、悲鳴を上げてのたうちまわるところだろうが、ライトはどちらでもない。

むしろ、弾は当たっていないとでも言つた状態。

何なんだ。さっきからこいつなんかおかしいぞ。それに、銃弾を打ち込んだところから一切流血すらしていないだなんて・・・

「お前・・・人間じゃないな？」

「やっとながついたか。」

そう言つてライトは自分の腕の皮膚を剥いで見せた。

なんとも痛々しい光景に思わず目を瞑りたくなるが、それも言っていられない状況下。

だが、見せられて驚いた。皮膚の下から見えたのは、筋肉でも流出する血でもない。鉄で出来た腕。

「・・・ロボットか・・・！」

「私は、マスターに部外者の排除を命令された始末用のアンドロイドだ。」

そう言っただけでライトは真剣を構えてこちらをじっと見つめてきた。何だ。俺に何が言いたい。

「よかったな。私を見る事ができて。」

「良かったなんて思っていないね。むしろ不運だ。最悪だ。つか、ロボットのくせにナルシストなんですか？」

なんだか・・・ナルシスト発言のように聞こえたのでそう言っただけで、それを聞いてライトは何故か微笑していた。なんだか気持ち悪い・・・。あんまりいい気分はしないな。

「・・・私は・・・」

そうライトが主語だけ呟いたと同時にピアスに仕込まれていた通信機から雅さんの声が響いた。

「昶！今すぐそこを離れて！そいつは！昶の目の前にいるそいつは・

・
・
『！！』

第4舞：繋がり

第4舞：繋がり

「・・・私は・・・」

そうライトが主語だけ呟いたと同時にピアスに仕込まれていた通信機から雅さんの声が響いた。

「昶！今すぐそこを離れて！そいつこそ今回の裏情報の正体！昶の目の前にいるそいつは・・・！！」

何者からか追われているらしい。通信機の向こう側から複数の追いかける足音と、銃声。

そして目の前で真剣を構えて言葉を紡ごうとするライト。そして狙われている俺。

「社長の最高傑作、殺戮兵器のアンドロイドだ！」

雅さんとライトの声が被ると同時に、ライトが一気に攻めてくる。

ピアスの向こう側では雅さんが撃たれたのか、呻き声をあげた。同時に起こる危機に頭が上手く回ることができず、何とか避けたのだが、肩を少し斬られた。

「つく・・・。」

「にげ・・・ろ・・・！」

雅さんも苦戦しているようだったが、俺に最後にそう連絡を入れると通信を切られた。

・・・なんとか逃げなくちゃ。目の前の相手がロボットとわかれば、どんなにがんばっても勝ち目はない。

どうやって皮膚の下の鉄の体をこんなちっぽけな銃弾で打ちぬけというんだ。

「・・・死ねない。俺は、まだ死ねない。」

ライトとは反対方向にある窓に向かって走り出し、窓ガラスを破ってビルから飛び出す。

丁度下にあつた電線の上に着地し、その上を駆け抜ける。

あの狭い空間から脱出できたためこれで生存確率は多少あがったかもしれないけれど、まだ大丈夫ではない。

ライトもビルから飛び降りて、電線の上を追いかけてきた。

「くそつ……!!」

死ぬるかよ……。俺はまだ死にたくない!

明日は卒業式なんだ。クラスの皆揃って卒業しなきゃ、意味ないだろ!!

電線からビルの屋上へ飛び移ると、ビルの上を駆け抜けて、次へ次へと飛び移る。

そうやっているうちに、いつの間にかライトの姿は見えなくなっていた。あいつにプログラムされているシステムがどの範囲まで追えとか、そういう風に組み込まれているか、もしくはマスターの命令を受信して戻ったか……。

とりあえず、一休みをしよう……。肩をやられたし、腹を殴られたけれど、肺の辺りが痛い……。肋骨何本か逝つたなこりゃ……。

夜空を見上げ、気がつけばもう朝はそこに来ていた。

ああ……。この任務式開始までに終わるだろうか……。

俺はとりあえず雅さんに連絡を入れてみる。しかし、雅さんの通信機はなかなか通信を受け入れてくれない。

なんのための通信機だよ……。これじゃ雅さんが生きているか、捕まってしまったか……。わからないじゃないか。

「……。雅さん……。」

初めてだ。こんなに不安になるのは。

いつもはまわりに友達がいて、母さんがいて、理沙も遊びに来て、達也もすぐそばにいて、雅さんともいて……。

いつもそこに俺がいて、俺のすぐそばには皆がいることが当たり前だと思つてた。

けれど、今日、本気で殺されそうになって、雅さんを失いそうになって……。初めて分かった。仲間がいる本当のありがたさ。

戦っている中、本当は足が竦みそう、でもそんな中思っているのは母さんや友達。そして雅さん。

もう会えなくなるなんて嫌だ。ここに達也がいたら、本当にお前は泣き虫で弱虫だとかいわれてしまいそうだけれど、本当に不安で仕方なくなつた。

「……行かなきゃ……。」

それでも俺は恐れを知らない戦士のように戦い続ける。そうしなければ、きっとこの世界から悪い部分は取り除かれないのだから。何処の誰が、たった1人で何が出来る。もしそういわれたら。

確かに1人じゃなにもできない。できるとすりゃ、そりゃー募金活動とか、チャリティーの支援とか、その程度しか見つからないよ。

それでもこうして、演じ屋として人のために、世の中のために俺は演じ続けよう。

そして、少なくとも俺の目の前に見える世界だけでも。それは本当に無意味に近いことなのかもしれない。

けれど、それで人が喜んでくれるなら。誰かが救えるなら。

「……戦い続けるさ。な、親父。アンタもそうだったんだろう？」

何処からか、爽やかな風が吹きぬけ、俺の頬を包み込むように撫でていった。

きっとそれは、親父だったんだと思う。

「……ターゲット確認。」

頭上から降ってきた声に俺は睨みつけ、銃を構えた。

やはり頭上にいたのはライトで、ビルから真剣を構えたままの体勢で一直線に降りてきた。

俺はそれを銃の仕込みナイフではじき返し、ライトと距離をとった。

「どうだい、私の最高傑作、ライトは。」

不意に聞こえてきた声に路地の方へ視線を送ると、そこには金髪とも茶髪ともいえないような色をした短髪の男性が立っていた。

「……マスター。」

ライトがそう呟いた。と、いうことは、この男性こそ、あの会社の

社長であり、ライトを作った張本人。

「邑上匡弘か……。」

「ふうん。私の名前を知っているのかい。」

俺が彼の名前を呟くと、何がおかしいのかは知らないが、くくつと笑っていた。

「そこにいるライトはね、私が作った最高傑作であり、創造と破壊の結晶なんだよ。」

「理解不能だ。」

「そうだね、まだ君にはわからないだろうな。でも、素晴らしいとは思わないかい？ 私は自らの手を汚すことなく、人を殺めることが出来るんだよ……。そしてライトを介して殺害する様子のデータを回収し、より殺戮のシーンにリアリティを求めることの出来るゲームを作る。それに、ライトがいれば、不要な者は簡単に壊せる。」
「そう言う彼の顔はとても歪んでいた。もはや、思考回路が正常ではない。彼は二次元の世界に入り込みすぎて戻れなくなっているのかもしれない。」

「狂ってる。そして、アンタは可哀想な存在だ。」

俺がそう言っていると、彼は更に顔を歪め、ライトに命令を放った。

「殺せ。ライト。」

「御意のままに。」

ライトが再び真剣を構えて切りかかってくる。俺はソレを避けて、何とかならないものかと銃弾を打ち込んでいくが、やはりどうにもならない。

苦戦していると、横から発砲されて、わき腹を打ち抜かれた。

「……つく……はあつ……。」

「ふふ。愉快だ。」

社長さんは拳銃を構えてこちらに銃口を向けていた。狙撃はどうやら彼だったらしい。

その間にも切りかかってくるライトの攻撃を避けながら、俺は社長さんの拳銃めがけて発砲した。

しかし、特に銃にこれといった変化が見られないためか、社長さんは腹を抱えて笑い出した。

「ははは！君は本当に愚かだな！まともにターゲットも狙えないなら、拳銃など持つな！」

そう言つて社長さんが俺の頭目掛けて拳銃の引き金を引いた。

しかし、銃弾は飛び出すこともなく黙っている。

「な……に……？まだ銃弾は入っているはずだぞ……？」

困惑した様子で何度も何度も引き金を引く社長さんにおかしくなつて、俺は笑いながら言つてやった。

「ふふ……社長さん。俺が打ち抜きたかつたのはアンタでも拳銃でもない。その中だ。」

「な……っ!?!？」

そう、俺が銃弾を打ち込んだのは社長さんの銃口の中。俺の銃弾が詰まつて、中の銃弾が飛び出すことが出来ずにいるってわけ。俺の銃撃の腕舐めんなよ？

そう余裕の表情で社長さんを見てみると、ライトがまた切りかかってきた。

それをまた避けたのだが、俺は油断していた。ライトは仕込みナイフをグローブの下から飛び出させ、それで俺に切りかかってきた。

……カラント……

その音を立てて左目の部分だけ、仮面が欠けてしまい、変装用の特殊メイクもそこからはげ始めた。

「……その下に貴様の素顔があるのだな……楽しみだ。」

「……ライト。俺はお前を絶対に……解放してやる。」

「解放？ふん、何を馬鹿なことを……」

余計なことを喋ってくる社長に向けて片方の銃で威嚇射撃をした。すると、社長さんは素直なものですぐに黙り込んだ。

ライトが真剣を構え、俺が二丁銃を構え……同時に路地へと飛び

出し、追いかけていながらの攻防戦が始まった。

大分空も明るくなってきた。卒業式・・・間に合うかな。通勤・通学を始めた人がこちらをみているが、もうこの際通報されても構わない。

ライトは俺以外は狙う様子はないようだから、なるべく付近に人がいないのを確認しながら、人気のない場所へと誘い込んで行っていたのだが・・・そろそろ俺も限界、かも。

肩も切られてるし、脇腹からはかなり出血してるし・・・肺も苦し
い。

「・・・っ・・・。」

目眩がしてきて、思わずよろけたのをライトは見逃さなかった。

「ぐあああっ・・・!!！」

彼の真剣が俺の腹に完全に貫通した。まるで串焼きのように。おいしくないって俺・・・。

「・・・。」

無言でライトが串刺しになったままの俺をそのまま真剣で持ち上げるものだから、もう悲鳴にならない痛みが走る。

痛いんだか熱いんだか・・・もうわけわかんない。

ただわかるのは、出血多量による感覚の麻痺と、こいつを、ライトを止めること。もうそれだけしか頭になかった。

「・・・ライト、・・・っ・・・アンタは、本当に・・・人・・・

殺して・・・いい気持ち・・・すん・・・のか・・・？」

「・・・私はそういう風にプログラムされている。」

「そう・・・じゃない・・・いくら、アンタが・・・人でなくて・・・も、・・・アンタにも・・・意思・・・ある・・・違っ・・・か・・・？」

「意思・・・？」

訳がわからないといった様子でライトは眉を寄せた。

はは、確かにそうかも。この人口ロボットなのにね。どうして俺、ロボットに説得してんだろ。自分でもよくわからないや。

ただ、もしかしたら、俺たち人間が気づいていないだけで、ロボットにも感情があるんじゃないかなって。なんかテレビで紹介された人型ロボットとか映画に出てくるロボットとか見てて、そう思ってたんだ。ずっと。

「そ……う、意思。」

「……私は……私……は……」
「ライト……」

彼の名前を呼ぶと、彼は何処か悲しそうな表情でこちらを見つめた。やっぱりこいうの見てると、喜怒哀楽とかあるんだと思うんだよね。そつと彼の頬に手を伸ばして、優しく触れた。そこから感じられるのは人間らしいほのかな体温と、少し違うけれど、似たような肌の感触。

「俺、アンタの……友達、に……なりたいな……」

その言葉をかけると、ライトの光りを失ったような瞳が何処か輝きを取り戻したように感じた。義眼だからそんなはずはないのかもしれないけれど。

「……人を殺めるのは……嫌だ。とても恐ろしい。殺めた事実がデリートされてしまえばいいのに。そう思うことがある。」

「うん……」

ポツリポツリと、ライトが言葉を紡ぎだした。それを俺は吹っ飛びそうな意識のなかしつかりと聞いてやる。

「私の手は……真っ赤に染まってしまった……こんな私でも、許されるのだろうか……?」

「うん……。許される……よ……ライト……が悪い……わけじゃ……ない。」

「……私を友と呼んでくれるのか……?」

「……うん……友達……だ……よ……」

ああもう駄目だ。すごく眠くて敵わない。血が足りないんだよ……。ごめんなライト、最後まで話聞いてやれなくて。

ちよつとだけ寝かせてくれないか? 本当、ちよつとだけだから。あ

あ、卒業式もうすぐだっけ・・・間に合うかなこれ・・・開式8時だからさー・・・5分前にでも起こしてよ。

「・・・おい、しつかりしろ・・・。」

ライトが揺さぶっている・・・と、思う。けど、俺の意識はそこでぶつつりと途切れた。

* * *

そこからのことはなにも覚えていないのだけれど、相変わらず無表情だが、一生懸命に俺を起こそうとしているライトの姿を、まだ生存していたらしい雅さんが見つけて病院へ搬送してくれたそうだ。雅さんもかなりの重症で、あつたにも関わらず、自分より俺の心配をしてくれてたそうだ。ついでに、あの社長さんは捕まって、会社の方は勿論消滅したそうだ。まあ、これは後日聞いた話なんだけけどね。

そして、今、目を開けば、白い天上と白いベッド。そしてベッドの横に置いてある椅子に座って俺の寝ているベッドにうつぶせになって眠っている・・・いや、多分これ寝てるんじゃないかと充電中か停止状態にあるのかもしれないけれど、ライトが視界に入った。

「・・・生きてる・・・。」

自分の体に触って確認をしていると、ライトが目を開けてこちらを見ている。

「・・・おはよう、ライト。」

微笑んでそう挨拶をすると、ライトは何処か困ったようにオロオロを視線を泳がせた。

あ、でもとりあえずはナースコールを鳴らしてくれたよ。

「おはよ・・・う？」

「うん。おはよう、ライト。目覚めたときの挨拶だよ。」

「そうか・・・。」

理解したらしく、ライトは小声で、おはようと何度も呟いていた。

「全く・・・深手を負いすぎなんだよ君は。」

左のベッドとを仕切るカーテンが開いたかと思い、そちらを振り向けば、腕に包帯と目に眼帯をしている雅さんがいた。

「生きていたんですか！」

「まあね。ちよつと負傷しちゃったけれど、僕、あの程度じゃ死なないよ。演じ屋の中で不死鳥の雅と呼ばれるこの僕がそう易々と散るわけがない。」

「あー・・・はいはい。」

「流したね。」

そうやって冗談をいい、笑いあっている間にお医者さんが駆けつけてきた。

俺の容態を確認しつつ、どういった状態で運ばれてきたのかとか何日寝ていたのかとか教えてもらった。

「・・・一週間デスト・・・？」

「そう。君は一週間も眠ったままだったんだよ。一時はどうなるかと冷や冷やしたよ。」

お医者さんがかなりマジな感じでそう言ったので、それほど俺はハイ状態だったということが推測される。

いや、本当・・・生きるって素晴らしいね。生き延びてよかった。

「あ・・・結局卒業式行けなかった・・・。」

深いため息をついて肩をがっくりと落とした様子の俺を見て、ライトが服を引っ張ったので何かと思いい顔を上げれば・・・

「今から卒業証書を貰いに行くぞ。」

とか言われちゃったんだけど。

無理じゃね？え？ライトさん本気なんですか？いやいやいや。俺まだちよつと立てないんですけど。今確実に体動かしたら口から血の噴水だよ？傷口開いちゃうよ？

「案ずるな。私が連れて行く。」

「・・・うわあ。王子様みたいな宣言。惚れていいですか?!」

「構わない。」

「……すみません。冗談です。真顔で答えないでください。」

小さくライトが笑った気がした。ライトは軽々と俺を持ち上げて、車椅子に乗せると、何故かロビーで車椅子を止めた。

わけが分からずにいると、突然、肩をトントンと叩かれ、振り返ればそこには、達也とクラスメイトの皆がいた。よくみれば、母さんに担任の相沢先生、校長先生もいる。

「おはよう、昶。」

「……おはよ……。」

キョトンとした様子で達也を見上げて、そう呟くと、達也は飛びつきりの笑顔を向けて、俺の頭を撫でくり回してきた。

嬉しいような、不愉快のような……。

「まったく！お前は本当に寝坊助だな！」

「……。」

でも、やっぱり嬉しい。本当に、あの日は死ぬかと思ったんだ。もう二度と皆に会えないかもしれないって思ってしまっただけで……でも、こうしてまた皆と会うことができたし、ライトももう大丈夫みたいだし、友達になれた。

「ちなみに、貴方が演じ屋とはばれていませんよ、ただ、事件に巻き込まれていた友人を助けようとしたらこうなっただと、ごまかしておきました。」

背後で雅さんがそう呟いた。その言葉を聞いてライトも隣で頷いた。

そっか……。2人ともありがとう。

「卒業証書授与。3年？組、喰牙昶。」

病院のロビーだというのに、校長先生は高らかに卒業証書を読み上げた。

「はい！」

病院で受け取る卒業証書なんてなんか変な気分だったけれど、みんなの思いがとても嬉しかった。

俺一人だけ写真に写っていないのはおかしいということ、不謹慎ながらも病院側にお願ひして写真を撮らせてもらった。

達也が貸してくれた制服の上着を羽織って、皆で卒業証書を持って、笑顔で一枚。

そして母さんと担任、校長先生に雅さんとライトも加わって、もう一枚。

何処の卒業生よりも強い絆で結ばれている素敵な写真ができた。これは、皆の宝物だねって、クラスの誰かがそう言った。

* * *

「さてさて。お仕事だね。」

「今回の任務は花嫁を逃がしましょう。大作戦ってか。」

「・・・問題ない。全力で応えよう。」

あれから数年後。俺たち演じ屋家業はまだ舞台から降りることなく、寧ろ、仲間にライトを加えて活動している。

どんなに危険だろうとも、せめて目の前に広がる世界が悲鳴を上げるのならそれだけでも。

ちっばけな努力といわれようが構わない。それで誰かが喜ぶのなら。

「・・・さてさて。一発華麗にやりますか。」

「そうだね。」

「了承した。」

『よかった、あの子元気そうじゃない。ね、貴方。』

湖の水面を白い足でけりながら、白いワンピースを着た女性が、陸のほうで腰を下ろしている男性に問いかけると、男性はニツと笑ってみせて自慢げに言った。

『当たり前だろう。俺たちの息子だぞ！』

『でも最後まで伝えられなかったのは父親だけは、本当に昶の実の父親だつてことくらいね。』

『そうだな・・・あの頃俺は狙われていたし、お前は病死で先に逝ったからな。施設に預けるしか安全な方法がなかったんだ・・・あいつがこっちに来る日には謝らないとな。』

『そうね。』

俺、ちゃんとわかっていたよ。

いつも夢にでてくる女の人が母さんだつて。心のどこかでずっとそう思っていたんだ。

いつも語りかけていたんだよね。夢の中では忠告していたんだろ？

『危ない、気をつけて。』って。

親父もいつもすぐ側で見ていること知っていたよ。

いつも風になつて俺の周りにいるもんな。

もう大丈夫だから。俺、1人じゃないからそんな過保護にならなくたっていいよ。

俺、2人の息子でよかったよ。

たくさん繋がりを入れてありがとう。

第4舞：繋がり（後書き）

。。。。。

。。。。完結万歳！

これにて糸冬了。。。|。。。)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3125/>

演じ屋

2010年10月28日08時29分発行